桜の絵を描く男

――受賞作品概要

桔梗第三

一

奈良の地に東大和工業団地ができて五十年近く、以前の小村は一挙に人口集中の町に変貌、駅前通りは商店街などの新設ラッシュ、裏筋の畑地は夜遅くまで灯の消えない飲食街へと変身し、ビジネスホテルの進出もあって人通りの絶えない賑わいを呈するようになったのだった。

しかしやがて団地を構成する主要会社を中心に生産拠点を逐次海外へ移すようになってくると、さすがの団地城下町も徐々に停滞の兆候が現れるようになってくる。特に小料理店、バー、スナックなどの飲食街通りは敏感で、人影の減少と共に、一般居住用住宅への建て替えが目につくようになってきたのである。

急に寒さが襲ってきた十一月のある朝、この日も彩子はいつもの通り郊外電車を降りると、国道に沿って工業団地に隣接する地元の大学へと急ぐ。学生会館の売店で時間給のアルバイトをしているのだ。昼間の担当だから、大体午前十時頃から午後の二時、時によっては三時頃までの勤務である。

途中ふと目をやると、ホームセンターと紳士用スーツ専門店共用のだだっ広い駐車場の真ん中辺り、そこにある低木の小さな植込みの縁に腰を下ろして絵を描いているらしい一人の男を認めたのだ。

彩子は少し方向を変えて寄ってみると相手は爺さん、輪郭を取っている最中か未完成、だが翌日の午後、今度は帰宅時に再び姿を認めたので肩越しに覗いてみると、何と水彩で満開の桜を、それも公園のように何本も描いているではないか。

何だかヘンと彩子はひるむ。時は冬に向かう季節、しかも爺さんの視線の先辺には、桜はもとより背丈のある樹木などどこにも見当たらないのだ。

ちょっとおかしい？　老人性の障害？

それだけではない。気配で顔を上げた男と目が合ったとき、彼女は思わずはっと驚く。いつかどこかで見た顔立ち、それも昨日今日ではない遠い過去。

思わず「総括さんでは？」と呼びかける。そうして駅の向こう、東通りにあったスナック「リリー」にいた「あやちゃんですよ」と名乗って、ようやく男の記憶を呼び起こしたのだった。

男は加勢悟朗、ここ工業団地の主軸会社で総務の責任者をしていた。立場上「総括さん」と呼ばれ、その愛称がいつまでも名前のようになっている。

二人は連れだって帰りながら、駅前の洋菓子店でお茶を飲む。かつてのスナックのホステスと客の間柄を忘れてただ懐旧の念が先行、身辺事情、暮らしの近況などを語り合う。そうしてその後さらに新年の初顔合わせとか、若草山の山焼きとか、折に触れ催しに合わせて昼食の機会を持ち、身近なことを話し合った。

家は、彩子の南方向なのに対し加勢は北、共に単身世帯のマンション住まいだが、加勢のは億ション、なに不自由のない結構な身分の爺さんと彩子は推測している。年は八十五、六か、六十に頭を出した自分と対比して彩子はそう踏んだ。

こうして思いもしなかった邂逅、そうして再びの出会いが始まったのだった。

そんなある日、加勢の毎日の賄に話題が及んだときだった。高齢で家事が大変なので、もし良ければ手伝ってもらえるとありがたいのだがと彼が言ったのだ。家政婦業である。給金は、貰ってる年金程度は回すことができると言うのだ。

他家にあまり深入りしたくない彩子は少しためらったが、報酬はかなり有利で、これからの自分の身の振り方にしても余裕を持って考えていくことができると、受けることにした。週三日、大学の売店が終わった後の四、五時間である。

こうしてお手伝いさん業務が発足したのだが、何日か過ぎた日の仕事の一段落したときだった。かつてホームセンターの駐車場で桜の絵を描いていた時の疑問を、彩子は加勢に投げかけたのだ。あれは確か十一月、樹など辺りにないところでどうして満開の桜を描いていたのかと。

ああ、あの絵ね、と加勢は言い、以前あの辺りに小さな桜の公園があったのを覚えているかと聞き、その光景が今でも見える、そうしていろいろなことが浮かんでくるのだと言ったのだ。

胸の奥に独り仕舞って話す人は誰も居ないということとか、こう察知した彩子は、それを聞くのも私の仕事のうちかもと考え、もしよければ聞かせて頂きますよと申し出たのだった。

二

加勢の話を聞く日は翌週やってきた。あれは確か昭和の四十三年だったな、と彼は述懐する。途中入社して十一年、総務一筋の課長職、そろそろ足を洗いたいと思うようになっていた頃だと言う。

その頃加勢の勤務する事業所は全工場あげて大阪の北部から東大和工業団地への移転を進めており、既に四つの工場はそこでの生産に入っている時だった。その日彼は直属の上司と共に分社社長に呼ばれ、奈良地区への赴任を命じられたのだ。ちなみに当時の会社組織は、総本社の下に五つの社内会社があり、それらを内部では分社と呼んでいる。加勢も当然その一つに所属、分社の社長は総本社では専務、上席常務になる。

で直々の指示は、工場部門の移転に対して本部はまだ先のこと。従って当グループの代表として地元の村長、村会への顔出しを密にし、村の有力部署、県の関連部門との連携を心して果たすよう、そのために総括総務課長の役職を設けたからこれで赴任してくれ、である。

同時に分社社長は、この機会に長年の念願であるショウルームを現地に造ろうと思うのだが、あんな田舎へ一体誰が見にくるのかと、事業部長連中から総反対されている。儂とてもやるからには賛成

されるほうがいいわけで、人を寄せるいい知恵がないか、考えてみてくれと言うのだった。

こうして彼は単身赴任したのだが、夏休み、初めてやってきた妻と息子を案内して法隆寺へ行ったときだ。強い日差しの下、仮設トイレの前に並んでいる日傘の列を見た彼は、ショウルームの客集めに、観光バス対象のトイレ施設を作ってはどうかと閃いたのだ。時あたかも名神と東名の高速道路が結合して我国最初のハイウエイが完成した年、まだまだ地道が主体だが、猛烈な勢いでバスツアーが増えていて、その場合トイレ確保が旅行業者の大きな仕事だという。

場所は当然会社のショウルーム予定地に隣接する八百坪、今のところ用途未定というから丁度よい。出来れば桜を何本か植えて、バス客はそこを潜り抜けてショウルームへ、戻れば桜吹雪で時間待ち。

しかし、と彼は思い直す。こんな社会奉仕のようなこと、民間会社の一社員が発想して良いことかどうか、加勢は疑問に思いながらも上司に問われるまま伝えた。

だが分社社長はこれを聞いて、面白いかも知れんなと受け止めたのだ。「大胆な発想や。やってみたらどうか」と評価したのだ。こうしてテーマは現場建設チームに引き継がれ、実施に移されたのだ。

それから十年余り、トイレ桜公園は見事に当たり、春秋には十台のバス駐車スペースは常時満車、その分そっくり、人がショウルームに流れ込んだのだ。

二年後、加勢は総本社の特別表彰を受け大いに面目を施す。しかし全社的には一つの変動期に差し掛かっており、八十になった総本社の社長の退任と新社長の就任、これに伴う古参役員の自主的退社、加勢の発想を評価した分社社長もこの一人として身を引くことになったのだ。さらに二年後、彼の直属の上司も定年を迎え、加勢を引き立てた有力者は二人ともいなくなったのだ。

総本社の新社長は先ず手始めに五つある分社の社長人事に手を付け、今まで独立独歩の運営であったのを横並びに任命し直すことをした。この結果風通しは良くなったが専門性が軽視され、結果として加勢のいる分社は徐々に赤字が続くようになった。そのため社長の交代が度々おこる。桜公園も当初の意図、経緯がすっかり忘れられて無駄遣いの槍玉に挙げられ、有料駐車場へ、テニスコートへと姿を変えさせられていったのだ。

「やがて俺も定年でね。やっと解放だな」と加勢は笑い、「でもね、この話の初めに色んなことが浮かんで来ると言ったけれど、それは湿っぽい恨みつらみの類ではないからね」と付け加えた。

総括さんは憤っていると彩子は思う。トイレ桜公園では筋の通らない不合理に翻弄され、駐車場の番人、テニスコートの管理人と渡り歩いて、今、世の中世界を見渡すと、もっと狡猾な不合理が横行している。我慢がならないのだろうと察した。

三

加勢宅の家事に関わりだして半年、その間加勢は何度か、彩子を遠出の昼食へと連れ出した。久し振りにうまい鮨を食べようとか、土用だから鰻を食しようとかいずれも大阪で、帰りに必ずゲームセンターへ寄り、本物の銃よろしくガンマシンを彩子にも持たせて撃たせるのだ。

そんなある日、友人の息子で国会議員をやっているという人物を囲んでの会合の日だが、加勢は夕方帰って来ると、何を思ったのか書斎から桐の箱を出してきて彩子の前で拳銃を取り出したのだ。

「本物？」と驚く彼女に弾が入ってないからと渡し、ゲームセンターでの要領と同じだと引金を引かせる。戦時中、パイロットとして民間会社の貨物輸送から海軍に徴用されたとき、保身用として持たされたものだと語った。

八月の終わりだった。一日を終えて一休みしたとき、加勢は打ち解けた一刻と見たのだろう、彼の最後のお金が銀行の貸金庫にあり、遠方で少し重いので一緒に取りに行ってもらえないかと言ったのだ。重い、遠いってどういうこと？　と問うと、金の延べ板で3キロ程度、場所は東京の溜池、まあ霞が関だという。

どうしてまた、そんなとこに、と思ったときだった。微かな怯えが彩子の背中を走ったのだ。私を連れ出そうとしてるのではないかと。

ピストル、ゲームセンターでの繰り返し射撃、霞が関。それに家政婦業を始めた今年の春頃、加勢のプリンターにあった受信メールの一部、誰か要人らしい来訪が十月確定との印字、記号表示が多く、秘密文書かと疑った記憶がある。

まさかこの私が巻き込まれる？　断らなければ。

加勢も彼女の乗りが良くないのを見て取ったか、また改めてと話を打ち切った。

そんなある日だった。嫁ぎ先の博多に住む姉から電話があり、実家を継いでいる兄の良作が脳梗塞で倒れたと伝えた。後遺症の心配はないらしいが、とに角九州へ帰らなければと加勢の了解を取る。

こうして久し振りに故郷の土を踏んで二週間ほどした頃、今度は加勢の娘から電話があり、父が玄関で足を踏み外して骨折したとのこと。彩子は急ぎ奈良の総合病院へと引き返す。

見舞ってみると加勢の病状は重篤、内臓も弱っていて肺炎を併発してるという。

ベッドの加勢は酸素マスクをしていて、脱色したような頬には生気がなく、これ総括さん？　と一瞬思ったほどだった。

再びの健康回復を念じて彼女はまた九州へ戻る。そうしてこれからは生まれ育った地で生活をし直していこうと腹を固める。幸い高校時代の友人の紹介で、地元企業の健康保険組合に働き場所を見つけられそうだ。残るは住宅、仕事優先か、姉や兄たちと少しでも顔を合わせやすいところを選ぶか。そんなことを考えていた頃だった。平べったい小包が郵便局から届いたのだ。割れ物注意の青いラベル。差出人は加勢の娘さんの名前。

すーと体から血が引いていく。

平べったいのは額縁の入った紙箱、ガラスは別包みで、あの桜の絵がマットに合わせて挟んである。

白い洋封筒にはハガキ大の印刷物と四つ折りの便箋。印刷物は死去通知で、父悟朗儀、享年九十一とある。

総括さん、九十を超えていたんだ。知らなかったと彩子は呟いた。